
I・S～黒き翼を背負う者～

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・S〜黒き翼を背負う者〜

【Nコード】

N8524T

【作者名】

カオス

【あらすじ】

ISのifストーリーです。

一夏の親友で一夏と一緒に藍越学園を受けようとする生徒いたら、そしてその生徒もISを起動させられるのなら。

そんな感じのストーリーで基本原作沿いです。気が向いたら見て下さい。

第一話 IS 起動

よう、

俺の名は沖浦雄太だ。

常にエアガン持ち歩いている普通の中学三年生だ。

「常にエアガン持ち歩いているのは普通じゃねーよ」

俺の心にツツコミが入る。

「一夏、人の心よむなよ」

今突っ込んだのは小学校からの幼なじみというかもはや悪友の域にいる俺の親友の織斑一夏。

「てゆーかさ一夏、会場何処だよ」

「知らねーよ。それにこれ、どうやって二階に行くんだ？」

どうやら中三になって二人揃って迷子になったらしい。

というか、この建物非常にわかりにくい構造をしていて利便性が伴ってない。

「しかしこの、『常識的に作らない俺カッコイイ』的な感じはなんなんだ……。階段はどこにあるんだよ……」

「一夏あんまり気に悩むな。それより早く試験会場見つけようぜ」

何故俺達がこんな所にいるかというが一夏と一緒に私立藍越学園の入試試験を受ける為だ。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ。俺は、それでいたい正解なんだ」

「わかった、一夏。お前に任す」

「任せておけ」

そう言っで一夏が近くにあるドアに入って行く、俺もその後についていく。

しかし、この判断にこの後俺が多い後悔する事を俺この時点では知る由もない。

中に入ると神経質そうな女性教師がいた。

「あー、君達、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいっつらないわ。……」

どうも忙しいらしく女性教師は俺達の顔を見ずに指示だけ出して出ていった。

「着替え？はて、今日日の受験は着替えまでするのか、雄太？」

「俺に聞くな、大方カンニング対策だろ」

昨年起きたカンニング事件のせいで今年から入試会場を二日前に通知するという政府のお達しがありそれ以外にも各学校でカンニング対策があつても不思議ではない。

そう思いながらカーテンを開ける。

カーテンの向こう側には鎧のような『何か』が跪く様に二つ置いてあつた。

「一夏これって……」

「ISだよな」

- IS -

正式名称『インフィニティ・ストラトス』宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

以下説明は割愛。

「なんでISがこんなところに」

「一夏どうやら俺達間違えてIS学園の試験会場来たらしいぞ」

「マジで」

「マジらしい」

「一夏なんか悩んでるぞ。」

「で、どうする」

悩むのを止めて一夏が聞いてくる。

「うーん、そうだなとりあえずISに触ってみないか」

「そうだな。ISに触れる機会なんてそうないからな、じゃあ、せ

「のでで触るからな」

「オツケーわかったよ」

「せーの」

一夏の合図で俺と一夏が同時にISに触れる。

「！？」

キンツと金属質の音が頭に響く。

それから、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『IS』の情報がすべて理解できる。

「な、なんだ……？」

「おいおい……」

『IS』が自分の手足のように動くのだ。

一夏の方を見ると俺と同じように『IS』を起動させている一夏がいた。

この瞬間『IS』を起動させる事のできる男が0から2になった。

第二話実技試験の相手は最強の女

俺は今IS学園試験会場特別待機室にいる。

ISを起動させた後結構な騒ぎになった。

なにせ世界で初めての男の操縦者である。

あの後、先程受け付けをしていた女性教師が戻って来て腰を抜かした。

それでも女性教師は俺と一夏を使っていない部屋に入れて責任者に指示を仰ぎに出て行った。

10分ほどしてから女性教師は戻って来て実技試験をするから呼ばれたら来て下さい、と言ってまた部屋を出て行き5分後に一夏が先呼ばれた。

しかし一夏は10分と掛からずに戻って来た。

「一夏けっこう早かった」

実技試験というからもう少し掛かると思っていた。

「いやさあ、試験で模擬戦闘したんだけど試験官の人がいきなり壁に激突してそれで試験が終わっちゃったんだよ」

どうも試験官の自爆で終わったらしい。

そんな感じで喋っていると女性教師が部屋に入ってくる。

「沖浦雄太さん実技試験を行いますのでついて来て下さい」

女性教師はそれだけ言うのと部屋を出た。

「んじゃ、一夏ちよつくら行って来るわ」

「おう、頑張つて来いよ」

一夏に見送られて女性教師についていく。

試験の会場は以外に近く2、3分で着いた。

試験の会場は大きなIS用のアリーナで中央に黒いスーツに仮面を付けた女性がかたわらに170cmのIS用近接ブレードが地面に突き刺さっていた。

ん？…仮面の女性？それにあの女性どこかであったことがある様な

……

「げえ、呂布!？」

「誰が三国随一の猛将だ、馬鹿者」

「あ、やっぱ千冬さんだ」

「うっ、いや違う私は織斑千冬と言う人間ではない」

「いや千冬さん自分で苗字言ってるし」

「むっ」

この人は織斑千冬さん一夏のお姉さんで元ISのパイロット。その腕前は第一回モンド・グロツソの優勝者で今は引退している。

千冬さんは渋々といった感じで仮面を外す。

「えーと、千冬さん。なんで仮面なんか付けてるんですか、それにごうしてこんな所に、もしかしてIS学園で教師をやってるんですか」

「千冬さんではない此処では織斑先生が試験官殿だ。

で、私はけっこう前からIS学園で教師をやっている。仮面を付けていたのは教師をやっているのを隠したかったからだ」

「えっと…じゃあ千冬さ…じゃなかった織斑先生はなんでIS学園で教師をやっているんですか」

「フッ、そこは女の秘密だ、野暮な事は聞くな」

千冬さんがクールに笑いながら俺の質問をスルーする。

「それじゃあ、もう一つ質問。なんで俺の試験官は織斑先生なんですか」

俺の質問に千冬さんか手をこめかみに当てる。千冬さん偏頭痛でも患ってるのか。

「元々の試験官の先生（山田先生）が先程の一夏の試験の時気絶してない。というか男の人の試験官は出来ないとか言い出した）したので代わりに私が臨時で試験官になった」

「あの、確かIS操縦者を守るシステムがあるからそう簡単に気絶なんてしないですよ。それに言葉の端々に何か聞こえたような…」
「気のせいだ」

千冬さんは俺の言葉を一蹴する。そして千冬さんが地面に刺してある近接ブレードを手に取り眼前に構える。

「受験生沖浦雄太ISを起動させるこれからIS学園の入試実技試験を始める」

「えっ、織斑先生はISは使わないのか」

「沖浦雄太、私に同じ事を二度も言わせるな。それにISを動かして30分も経っていない奴にIS等いらん。さっさとISを起動させる」

俺は千冬さんに言われて左腕に付けたISの情報が入ったブレスレットを上挙げる。

「打鉄、セット」

ブレスレットから薄い光が俺の体全身を覆う。その光が弾けると俺は打鉄を装備していた。

右手に重みを感じると近接ブレードが展開されていた。展開された近接ブレードを中段に構える。

「ではこれから受験生沖浦雄太の入試実技試験を始める。ルールは簡単だ。私がそこまでというまで沖浦には私と戦ってもらう、これは生徒がどれくらいISを乗りこなす事が出来るかを計るための試験だからこの試験の結果で試験そのものが不合格にはなったりしないから気楽に受けていいぞ。では試験を開始する」

開始の合図を出すと同時に千冬さんの姿が消える。

「なっ……」

千冬さんが消えると同時に打鉄のハイパーセンサーが千冬さんの右からの接近を確認。

「はっ！」

センサーを頼りに振り向きながら近接ブレードを振るう。

「甘いな」

俺が振るった近接ブレードはやすやすと千冬さんに弾かれた。

「まずは一本」

近接ブレードを弾かれてから空きになった胴体に千冬さんの近接ブ

レードが叩き込まれる。

俺はその反動を使って千冬さんと距離をとりダメージを確認する。
各部損傷なし。

絶対防御使用。

シールドエネルギー150から100に減少。

結果から言って特に問題はない。

絶対防御とはシールドバリアを超える攻撃を受けた時に発動する操縦者を守る機構でこれが発動するとシールドエネルギーが大幅に減少する。

このシールドエネルギーが0になるとISは機能停止に陥る。

ちなみに通常のシールドエネルギーの量は今の数値の倍以上あるが今乗っている打鉄は試験用にエネルギー量を減らした状態にある。

以上、打鉄のデータベースより抜粋。

「織斑先生今の動きはなんですか、消えましたよね」

昔剣道をやっていたので動態視力にはそこそこ自信があったがああも簡単に見失うとは思わなかった。

「なに、重心を右にずらすと同時に左に移動しただけだ。」

「なんですかこの人さらつと凄い事言いましたよ。」

さすが第一回世界チャンピオン生身でもあんなに強いとはその強さたるやかの三国志のさる猛将の如く。

「誰が呂布だ、馬鹿者」

更に読心術も使えるらしい。勝てる気がしない。

「しかし、初めてISに乗ったにしては良い動きをするな。このまま終わらしてもいいが…よし、今から特別授業を行う。授業内容はシールドエネルギーが0になる前に私に一撃入れる事、もしそれが出来れば私が何故ここで働いているのかその理由込みで教えてやる」

「でも一撃入れたら織斑先生が只では済まないんじゃない？」

「そんな事は気にするな今足だけISを部分展開させたから沖浦の

攻撃が万が一当たってもISの絶対防御で怪我はせん」

確かに足元を見ると先ほどまでは黒のハイヒールだったのがISの装甲に変わっている。というか先ほどの消えるような動きをハイヒールで出来るとはやはり元とはいえ世界一は違う。

「分りました、しかし織斑先生さっきの話忘れないで下さいね」

「私は嘘はつかん」

千冬さんは俺が小学校の頃から面倒を見てもらっていて家族のいない俺にとって本当の家族のような存在だ（一夏もだぞ）その千冬さんが俺に内緒で何かをやっているのなら俺はできる限り力になりたいと思っっている。

「わかりました、でも一つ言っておきます」

「なんだ」

「絶対に一撃入れますからね」

俺の言葉に千冬さんは少し驚いた顔をする、しかしすぐにいつものクールな顔に戻り

「まあ、せいぜい頑張るがいい」

「では、行きます」

俺は近接ブレードを両手で握り千冬さんに斬りかかる。

千冬さんも自分の近接ブレードで応戦する。

数合斬りあってから一度距離を取る。

「なんだもうお終いか」

「いえ、これからですよ」

千冬さんの言葉に軽口を叩くが今の斬りあいでも分ったがこの人は強すぎる。とてもではないが今の俺では勝つ所か、一撃入れる事もままならないだろう。それ位の力の差を感じた。

一撃入れるには策を用意ないといけないだろう。

だが、まだシールドエネルギーには余裕がある少し位無茶を大丈夫だろう。

「よし」

作戦を簡単にまとめてからから近接ブレードを構えなおす。

「覚悟は出来たか次はこちらからいくぞ」

千冬さんは言葉と共に千冬さんが上段からの振り下ろしでこちらに斬りかかって来る。

俺はそれを近接ブレードで受け止め右に引いて流す。

それから千冬さんの空いた右のわき腹に近接ブレードを叩き込む。

「なかなか良い線を行っているが40点と言った所だな」

そう言いながら流された近接ブレードを戻しながら逆袈裟で俺の近接ブレードを弾く。

「二本目だ」

千冬さんが逆袈裟で振り上げた近接ブレードを振り下ろす。

しかし千冬さんの近接ブレードは俺には届かなかった。

「ほおう」

千冬さんが初めて驚きとも感嘆ともとれる声を上げる。

理由は千冬さんの近接ブレードに打鉄の非固定ユニットの盾を横殴りに叩き付けて近接ブレードを弾いたのである。

まだ動かした事がない盾が思ったように動くかは分からなかったがどうやらうまくいったようだ。

俺は弾かれた近接ブレードをすぐさま構えなおし千冬さんそれを突き出す。

その必殺の突きは吸い込まれていくように千冬さん向かっていく。

「もらったあ！」

その時の千冬さん顔に笑みを浮かべていた。

まるで子が弟子の成長を喜ぶような余裕のある笑み。

「惜しいな」

近接ブレードは千冬さんに届かなかった。

千冬さんは飛んだ。

近接ブレードが当たる前に上に上昇し俺の近接ブレードの上に止まった。いや正確には近接ブレードの少し上に止まっている。

「今の作戦は良かったぞ、今の一連の動きがすべてお前の作戦なら40点から60点に引き上げだな。」

しかし相手が悪かったな」

そう言つて近接ブレード振るう。その近接ブレードは抵抗できない俺の頭に直撃する。

シールドエネルギーが30まで減少してあと一撃もらえばシールドエネルギーがゼロになるだろう。正直言つて後がない。

「さて、もう後がないであろう沖浦受験生に此処までの健闘を讃えて良い物を見せてやろう」

千冬さんが少し笑いながら言う。はっきり言つてこの状況で俺にとつて良い物が出るわけがない。差し詰め本気を出すとか私のISを見せてやろうとかそんな感じだろう。

「私の実力の一端見せてやろう」

はい、来たあー(＾o＾)ノー

あまりの予想通りに一瞬なんか変なのが出たがあまり気にしないでくれ。

千冬さんの腕が光とそこにはISの装甲を纏わせた腕があった。

その装甲は雪を思わせるような純白で黒のスーツとはミスマッチに見えるが不思議とあっている様に見える。

「さて、そろそろ終わりにしようか」

「俺は諦めませんよ」

「往生際が悪いな、しかしそうというのは嫌いではないぞ」

「えっ」

「隙あり」

俺が千冬さんの言葉に驚いていると千冬さんが高速で接近してくる。

高速で接近する千冬さんは近接ブレードを居合抜きの要領で振るう。

「おわっち」

俺はそれを紙一重で避ける。

「止めだ」

抜き放つた近接ブレードを上段に構え縦一直線の鋭い斬撃が襲いかかる。その鋭さは先程の斬り合いの比べ物にならない。その斬撃は避ける事が出来ないと判断し非固定ユニットの盾を俺と千冬さんの

間に移動させ防御する。

しかし、この行動は無意味だった。

振り下ろされた千冬さんの近接ブレードは盾に当たったと思ったと同時にまるで最初っからそこに存在しなかったかのようにあっさり切り裂かれてしまった。盾を切り裂いた近接ブレードが俺に迫って来るがそれを防ぐ術がない俺はあっさりと斬られた。

そこでシールドエネルギーが0になり打鉄が光の粒子となって消える。

「あゝ、負けた」

俺は開口一番にそういった。いや、あれはチートですね。勝てる気がしない。きつとあの人は人の皮を被った鬼か三国志の猛将の魂が宿ってますね。

「では、これで沖浦受験生の実技試験を終了する」

ISを解除した千冬さんが試験の終わりを告げてこちらに来る。

「千冬さん強すぎですよ。はつきり言って手も足も出なかったですよ」

ああ、これが経験の差だな。

「織斑先生だ、馬鹿者。まあ、しかしさつきも言ったが筋は悪くなかったぞ」

おお、あの千冬さんが褒めるなんて珍しい。いや、まあ褒められるのはうれしいがこれは赤飯を炊かなきゃな。

「赤飯を炊かなきゃな」

「何を言ってるんだ、お前は」

うむ、大事な事だから二回言ったら千冬さんに白い眼で見られた。

千冬さん赤飯嫌いだったけ。

「まあ、そんな事は置いといてこれから三年間お前はIS学園の生徒だ」

やっぱりIS学園への入学は決定なんだ。まあ、ISが使える男を各国が放っておく訳かない。下手したら冗談抜きで誘拐とか起きかねない。

「はいつ、織斑先生」
俺は敬礼の真似事してみる。
「では、またIS学園で会おう」
そして実技試験が終わった。

追記

俺が試験会場のアリーナを出ようとするのと千冬さんが俺を呼び止める。

「ああ、雄太ちよつと待て」

「なんですか千冬さん」

名前で呼んだという事は今はプライベートタイムらしい。

「この事は一夏には内緒だぞ」

「なんでだ、千冬さん」

「一夏へのちよつとしたサプライズだ」

「おう、わかった」

そして俺はアリーナを出て行った。

第二話実技試験の相手は最強の女（後書き）

戦闘が途中からぐだぐだになったような……
次は入学式の後のSHRになります。

第三話 クラスメイトは九割女

視点boy一夏

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む副担任こと山田真耶先生。

第一印象はサイズの合っていないだぼっとした服装のせいで『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、俺だけだろうか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「よろしくお願いしまーす」

教室の中が変な緊張感に包まれていいるにも関わらず俺の幼なじみの雄太は気にせず返事をしている。

「じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で返事をするのが一人だけの中頑張る副担任がかわいそうなので、せめて俺も反応したい所だが、あかんせんそんな余裕はない。なぜか。

簡単だ。俺と雄太以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

これは…想像以上にきつい……
自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中の前から二番目なんだ（雄太は俺の前）。めっちゃめっちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

俺は前の雄太の方を見る。

雄太はこの視線が刺さるなか暢気に座って頭の後ろで手を組んでやる。きつとこいつの神経はうどんぐらいに太いにちがいない。…そんなに太くないか。

次に俺はちらりと窓側の方に目をやる。

「……………」
何かしらの救いを求めている視線だったんだが、薄情なことにもう一人の幼なじみの篠ノ之箒はふいつと窓の外に顔を反らした。なんてやつだ。これが六年ぶりに再会した幼なじみに対する態度だろうか……いや、もしかして俺嫌われているんじゃないか？

パンツ

「っ……！」

突然前から大きな音が響き教室が静かになる。

前を見てみると雄太が机に手を置いた状態で立っていた。

視点by雄太

よう、俺だ。

なに、誰だか分からないだと。俺だよ、俺、雄太だよ。

まあそんなことは置いていまま俺は教室で高校最初のSHRを受けている。

副担任の上から読んでも下から読んでも山田真耶先生やまだまやが自己紹介をさせている。

今出席番号が俺より一つ若い江元さんが自己紹介を終えて俺に回って来た。

「次は沖浦君お願いします」

「はい」

山田先生に言われ自己紹介をすべく席を立ち後ろを向く。

後ろを向くとクラスの女子29名(31人中)がこちらを向き俺の後ろの席の一夏が何か考え事をしている。

最初の自己紹介はやはり派手にやった方が面白いと俺は思う。

俺はゆつくりと右手を挙げる。クラスの女子がその手を見つめているが一夏はまだ考え事をしているらしく下を向いている。

俺がそのまま思いつきり自分の机を叩くとパンツと音が教室に鳴り響く。(手が痛い)

クラスの女子や一夏は驚き後ろの山田先生はあわあわと慌てているが無視して自己紹介を始める。

「俺の名前は沖浦雄太。趣味は読書と体を動かす事だ。けっこうI Sの知識が豊富なのがちよつとした自慢だったりする」

俺はそこで一旦止めてクラスを見ましてから続ける。

「一つ言っておく、俺に触れると火傷するぜ」

「……………」

あゝ、やばい。ちよつと飛ばし過ぎたか、教室の生徒のほとんどがポカンとしていた。

「かつ」

「かあ？」

「……カツコイ……」

突如大声で黄色い声をあげた。

「何今のチョーカツコよくない」

「素敵すぎる」

「私鳥肌たつてきちゃた」

「それに顔も結構いけてるし」

「私を火傷させて」

まあ、いろいろ聞こえてくるが無視しよう。自己紹介終わったしな。

「以上でブフツ」

パンツッ！いきなり頭を叩かれた。

喋っている途中だったので舌を噛んで更に痛い。

恐る恐る振り向くと黒のスーツに身を包んだ女性がいた。

「げえっ、関羽!？」

一夏がそう言うともたしもパンツッ！と今度は一夏が叩かれた。

「いつ」

「一夏、関羽じゃなくて呂布だ」

パンツッ！また叩かれた。

「誰が三国志の英雄や猛将だ、馬鹿者」

威圧感のある声とともに千冬さんが現れた。

「あ、織斑先生もう会議は終わられたんですか」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶押し付けてすまなかつたな」

おお、千冬さんの優しい声だ。

その後千冬さんが自己紹介をし女子が「キャー千冬様よ」と黄色いを出す。千冬さんは一蹴する。

次の一夏の自己紹介で一夏と千冬さんが姉弟とばれてまた女子が騒ぐ。

そこでチャイムが鳴りSHRが終わった。

第四話セシリア・オルコット、ですわ(前書き)

長くなつてすみません。
では、さよう。

第四話セシリア・オルコット、ですわ

一時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。中々面白い授業だった。

なに、男なのにISの授業について来られるのかって。

俺の夢はISの開発関係の仕事に就く事だからな中学の時から勉強してたから普通について来られるよ。

一夏はついて行けてないようだが、まあいいだろ。

「……沖浦、織斑ちよつといいか」

「ん？」

「え？」

突然、話しかけられた。

「……箒？」

「……」

「……」

おいおい一夏、いくら六年ぶりの再会だからって幼なじみを疑問系呼ぶなよ。

「廊下でいいか」

「おう」

「いいぜ」

俺達三人は廊下に出る。

だがまあ、廊下に出たんだが廊下には俺や一夏を見に来た他のクラスや二年生や三年生詰めかけて来ていた。しかも全員が聞き耳を立てているから教室で喋っているのかわらないな。

「そういえば去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「一夏何言っただよ俺はその時直接行って応援したぞ。なあ箒」

「あ、ああ。そ、そうだったな」

俺が話しを振ると箒は少し顔を赤らめながら答える。俺に気があるのならかなり嬉しい。俺は唐変木の一夏とは違うし何より箒の事が

好きだからな。

「うわ、俺そんな事初めて聞いたぞ」

「今初めて言ったからな」

そう言うで一夏が「コノヤロー」と言いながらヘッドロックが炸裂する。

「なんで誘わなかったんだよ」

「そんな時お前バイトだったから誘わなかったんだよ」

「所でお前たち」

俺が一夏とじゃれあっていると箒が話しかけてくる。

「何故、六年ぶりいや雄太は去年会ったからから一年だが一目で私だと分ったんだ」

俺は一夏にヘッドロックされた状態のまま一夏を見る。それから一夏と同時に答える。

「髪型が変わってないから」

そう言うって俺たちは箒の頭を見ると、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

おお、照れてる照れてる。

キーンコーンカーンコーン。

二時限目の開始を告げるチャイムで、それまで俺たち遠巻きに見ていた包囲網も自然と瓦解する。

「俺たちも戻るうぜ」

「そうだな」

「わ、わかっている」

ふいつと俺たちから顔をそらし、すたすたと歩いて行った。

気があると思ったのは気のせいだったのかもしれない気だけに気のせい。

パ、パンツッ！

「沖浦、織斑さつさと席に着け」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

「うー、雄太助けしてくれ」

二時間目の休み時間、一夏の第一声がこれだ。

一夏が入学前に貰う参考書を古い電話帳と間違えて捨てたらしく新しいのを一週間で覚えなさいといけない。

「はあ、自業自得だろ」

「いや、まじで助けてくれ」

一夏は顔の前で手を合わせて必死にお願いして来る。

「ちよつと、よろしくて？」

「ん？」

「へ？」

俺が仕方ないなと言おうと思ったたら声をかけられた。

話しかけてきた相手は、金髪が鮮やかな女子だった。まあ女子しかないか。透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺達を見ている。

「聴いてます？お返事は？」

「あ、ああ。聴いてるけど……どういう用件だ？」

一夏かそう答えると、目の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰だかしらないし」

彼女も彼女だが、今のは一夏も悪い。そうやって邪険にするのではなくもつと柔らかく言えば良いのにそれではかえって逆効果だ。

俺は仕方なく二人の間に入る。

「一夏いまの言い方はよくないぞ。そうやって相手が悪くても邪険に扱わない、それに彼女の名前はセシリア・オルコット。イギリス

の代表候補生だよ。あとクラスメイトの名前ぐらい早く覚えたほうがいいぞ」

「でもな雄太……」

「ちよつとなんですか今のは、その言い方だとまるで私も悪いみたいじゃないですか」

「セシリアさん、いくら代表候補生だからって調子に乗らないでなideくれ。まだ入学一年目なんだから俺たちに特別差があるとは思えないが」

「なんですてえー」

しまった仲裁に入ったつもりがいつののまにか喧嘩を売ってしまった。

「ちよつと質問いいか」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏ナイスだ。

怒っていたセシリアは一夏の方を向く。

「代表候補生って、何？」

いや、そのくらい知っとけよ。

一夏のあまりの発言に聞き耳を立てていた女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ、……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

かなりの剣幕だった。怒りの余波がこっちにまで来そうだ。

「おう、知らん」

「……………」

セシリアは怒りが一周して冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ言い出したので代わりに俺が説明する。

「国家代表IS操縦者の候補生として選出される有能な人材のことだ。……単語からわかるだろ馬鹿が」

「そついわれればそつだが、馬鹿言つな」

「そう！ エリートなのですわ」

さすが代表候補生、復活が早い。

ビシツと一夏にに向けた人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。

「大体、あなたISについて何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね」その後、俺の方を向く。

「そちらのあなたはまだISについて少しは知っているようですが何か勉強をしていたのかしら」

「IS開発技能師資格持つてるからな、自慢じゃないがISの知識量には自信があるぜ」

IS開発技能師資格とはISの開発に関する国家資格でこれが無くてもISの開発はできるがこの資格があると何処の会社でも優遇される。

理由としては資格保持者がかなりすくないからだ。

世界でも100人程で日本ではISを作った束さん、打鉄を開発した人、そして俺の三人しかいない。

俺つてなにげに頭良いんだぜ。

「ほ、本当ですか？」

おお、さすがの代表候補生も驚いてる。俺はポケットから財布を取り出しその中から運転免許証ぐらいの大きさの技能師のカードを取り出しセシリアに渡す。

「本物ですわね……」

まあ、でもIS学園に入るのですからこれくらい当たり前ですわね。それでもISの操縦に関してわからない事があれば、泣いて頼まれれば教えて差し上げましてよ。なにせ入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

やけに、唯一の部分を強調するな……あれ？

「そついえば一夏も教官倒さなかつたけ」

「おう、俺も倒したぞ教官」

「は………?」

一夏の話じゃ壁に突っ込んで自爆したらしいが……。

しかし今の事が相当ショックだったのか、セシリアは驚きで目を見開いている

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

「女子ではってオチじゃないのか?」

「ハハハ」

ピシッ。

俺が笑っていると氷にヒビが走ったような、そういう音が聞こえた。

「つ、つまりわたくしだけではないと………?」

「いや、知らないけど」

「あなた! あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!? たぶんってどういう意味かしら!?!」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ………」

キーンコーンカーンコーン。

話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。今の一夏にはさぞ福音に聞こえただろう。

「また後で来ますわ! 逃げないことね! よくって!?!」

そう言っつてセシリアは自分の席に戻り三時間目が始まった。

第五話黒衣の死神

放課後、一夏が机の上でぐったりとうなだれていた。

「おい、一夏生きてるかあ？」

「……」

「返事がない。唯の屍のようだ」

「生きてるわ」

おお、生きてたか。

「雄太、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

机の上で頭を抱えている一夏を見ながら俺は心の中でため息をつく。

「おい一夏、お前そんなんで来週のセシリアとの勝負大丈夫なのか」
二時間目の休み時間の後の三時間目にクラス代表者を決める事になったのだが物珍しいと言う理由で俺と一夏が推薦されたがそれに納得がいかなかったらしくセシリアが反論する。それだけなら良かったのだがそのまま日本を侮辱する様になり一夏が我慢できずに言い返してしまった。後は売り言葉に買い言葉で勢いのまま一週間後にセシリアとクラス代表者決定戦をすることになった。

「すまん、雄太」

いきなり一夏が両手を合わせて頭を下げてきた。

「このままじゃセシリアに勝てそうもないから俺にISの事教えてくれ」

そう言つて一夏は更に頭を深々と下げる。

こうやって必要なら臆面もなく頭を下げられるのは一夏の美点だろう。それに頼まれなくてもきつと教えてただろう。

「一夏、頭あげる一緒にセシリアに一泡吹かしてやるうぜ」

俺がそう言つと一夏が嬉しそうに顔を上げる。

「おお、ありがとな雄太」

「気にすんな。俺とお前の仲だろ」

「それもそうだな」

「あつ、よかった。沖浦君と織斑君まだ教室に居たんですね」

「はい？」

「ん？」

呼ばれて俺達は顔を上げると副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えつとですね。寮部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号が書かれた紙とキーを渡す山田先生。

そうIS学園は全寮制なのだ。

ん？ でも確か……。

「俺達の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？ 前の話だと一週間は自宅から通うって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として三人部屋に二人で住むらしいんです。……二人共そのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後は俺達だけに聞こえるように耳打ちしてきた。

「そう言うわけで、政府特命もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。あ、それと二人の荷物なんですけど……」

「私が二人の分を手配しておいてやった。ありがたく思え」

おお、この声、絶対千冬さんだ。いつ現れたかはわからなかったが、すでに俺と一夏には無条件でダースベイダーの曲が流れている。

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

すげえおおざっぱ。そんな適当だと将来困るぞ24才社会人。スパン。

「あの、すみません」

俺が千冬さんの出席簿アタックで呻いていると山田先生がおずおずと断りを入れてきた。

「なんだ、山田先生」

「織斑先生と沖浦君ってどういった関係なんですか。唯の友達の姉とかには見えないんですが……。はっ、もしかして二人は付き合っているのですか、ダメですよ教師と教え子でそんな関係になったら、でも、この二人ならきつといい絵になるんだろっな」

最後の方は顔をうつとりさせて自分の世界に入り込んだ山田先生それに千冬さんは頭を押さえながらため息をつく。

「山田先生」

「はいっ!？」

千冬さんの一言で山田先生が現実に戻って来る。

「山田先生、私と沖浦はそんな関係じゃない。一年程前に色々あって親戚のいない沖浦の保護者になっただけだ。

何か質問あるか」

千冬さんは聞いてはいるが質問するなというオーラを醸し出している。

「な、ないです」

千冬さんのオーラに当てられ山田先生は少し縮こまっているがしっかりと返事をしている。他にも聞き耳を立てていた女子生徒達もサァという音がつきそうな動きで散らばって行く。

それからいくつか寮での注意事項を聴いた。

「はい、説明は以上です。気をつけて帰って下さいね」

「「はい」」

スパパアッン!!

「返事は短くだ馬鹿者」

「「は、はい」」

俺と一夏は見事なシンク口で返事しをしたが千冬さんの出席簿アタツクが炸裂した。

「織斑先生大変です」

突然教室に一人の生徒が入って来た。

その生徒は何かあったのか急いで来たようで息を切らしていた。

「落ち着け、何があった」

千冬さんに言われてその生徒は深呼吸をしてから話だす。

「正門の前で高校生ぐらいの男子が三十人ぐらいが沖浦を出せと言っているんですがど、どうしたら」

それを聞くと千冬さんはまた頭を押さえながらため息を付いた。

「沖浦お前に客だ、さつさと行つてかたずけてこい」

「わかりました、では織斑先生少しごみ掃除に行つて参ります」

「さつさと終わらせるよ」

千冬さんの言う通りそいつ等は俺に用があるようなのでその事を千冬さんに言つてから俺は教室を出た。

視点by 箒

私は今教室にいるのだがとんでもない事を聞いてしまった。

なんと幼馴染の雄太の保護者が千冬さんになつていたのだ。六年の間に何があつたのかはわからないが去年の剣道の全国大会の時に会つた時はそんな事一言も言わなかつたがあいつは昔から仲のいい奴に迷惑をかけないようにする所があつたもう少し幼馴染みなのだから頼つてくれてもいいと思うのだが……。い、いやこれは幼馴染みとしてであつて別に他意はなくてな。

「箒、ちよつといいか」

「な、なんだ」

だれにするわけでもない言い訳心の中でしていると一夏が声をかけてきた。

「雄太の後追いかけようぜ」

む、確かに六年前強かつたがさすがに一人で三十人を相手にするのは少し無理があるだろうきつと一夏は雄太の加勢に行くのだろう、ならば私も加勢するべきだろう。……。あ、あくまで幼馴染みとしてだな。

「箒、早くしないとあいつが不良を全滅させるぞ」

「よし、わかつた。私も加勢す……。ん？ おい、一夏。貴様今なん

ていった」

「いや、だから雄太の……。ああそうか箒は知らなかったな、まあ行けばわかるよ」

そう言つて一夏が私の手掴んで走り出す。

「おい、私は自分で走れる、手を放せ」

「このほうが早いって」

一夏は私の話を聞かずに雄太の後を追つていった。

正門の前に着くとそこには雄太と柄の悪そうな男が二十人ちよつととそれを見守る学園の女子という構図になっていた。

「沖浦！ 今日こそお前をギッタギッタして日頃の恨みを晴らしてやる」

不良の集団の先頭に大柄の男が雄太に大声喋りかけている所だった。

……でもギッタギッタはないと思うが。

「誰か忘れたがお前ギッタギッタ無いんじゃないかねえか」

雄太がそう言つと周りから笑い声が漏れてくる。

「う、うるさいお前らやつちま、がはっ!？」

不良が言い終わる前に雄太が腰に手を伸ばし銃を取り出して喋っている不良を撃ち抜いた。……って。

「雄太お前は人殺しをするなど見損なつたぞ昔のお前はそんな奴じやなかつたのに」

「おい、箒勘違いするな。こいつはゴムの銃弾を撃ち出す銃で撃たれても死なない」

雄太にそう言われて撃たれた不良を見ると胸のあたりが微かに上下している。たしかに死んではないようだ。

「ま、俺強いから安心して見とけて」

そう言つて雄太は一人で不良の集団に突っ込んでいく。

「相手は一人だやつちまえ」

不良の方もおのおの手にバットやら鉄パイプ等を持って応戦する。

しかし、あつという間に二十人以上いた不良達がすでに立っているのが五人程しか残っていない。だが注目するべきは雄太の相手の倒し方だ両手に銃を持ってはいるがほとんどをカウンターによる銃床での打撃や蹴り、それに投げ技がほとんどで最初の一発以外に二、三発ぐらいしか撃っていない。

「一夏、雄太はあんなに強かったのか」

昔から雄太は強かったが今は更に強くなっていて、つい私は一夏に聞いていた。

「筈が転校した一年後ぐらいに親の仕事の都合で転校して中二の冬に戻ってきて中三ぐらいから不良潰しをやってたぞ」

「不良潰し？」

「ああ、学校周辺の不良グループに殴り込みに行つて一人で全滅させてたぞ」

「……」

驚きで何を言っているのかわからない。

一夏はさらに続ける。

「で、その時いつも黒い服を着ていたから黒衣の死神ってあだ名がついてるよ」

よくわからないが雄太は私の想像を絶する中学校生活を送っていたらしい。

私たちが話をしている間に五人程だった不良も最後の一人になった。

「これが最後の忠告だ。さっさと失せろ」

「は、はい」

雄太は返事を確認すると銃を腰のベルトに差し込み不良に背を向けて去ろうとする。

「馬鹿め喰らいやがれ」

突然不良が懐から銃を取り出して雄太に向かって撃ってきた。

「雄太っ!？」

銃の撃つ音が正門に響き渡る。

「まったくこれだから馬鹿は嫌いなんだ」

「な、何なんだよ、それは」

結果だけ言えば雄太は無傷だった。

雄太は専用機持ちではないはずなのに左の肩から手にかけてISのような物をを部分展開させて銃弾を受け止めていた。

「お前には一生理解できないものだよ。サンダー」

雄太が言うのと左手から電撃がほとばしり不良に直撃する。電撃を受けた不良は煙を上げながら気絶していた。

「テイクオフ」

雄太の言葉に合わせて左腕のISのような物が光の粒子となって消えた。

それに合わせて周りの生徒は、

「ねえ、あれってISだよな」

「あの子、もう専用機持ちなの」

「私の買った調査じゃそんな情報なかったわよ」

それはどこ調べだ。いやそんな事はどうでもいい、あれはいつたい何なのだ。

「おい、沖浦」

「はい」

周りが困惑している中、千冬さんが雄太に声をかけた。

「今のは何だ」

今のはとはさつき出したISのような物のことだろう。

「一夏あれが何か知ってるか？ ISのように見えるが」

「いや、俺もあれは初めて見る」

さっきの物は一夏も知らないらしい。

こっちが話してる間に織斑先生と雄太の方も二、三言葉を交わしてからこちらをこちらの方を向いた。

「織斑、篠ノ之二人とも付いてこい」

「いや、千冬ね、じゃなくて織斑先生、付いてこいってどこに行くんだよ」

「いいから黙って付いてこい」
私と一夏は黙って織斑先生に付いていった。

第六話 P I S (前書き)

書き方を変えてみました。読みにくかったら言って下さい。

第六話 P I S

不良を掃除した後そのとき使った物について聞かれたがあの場で答えると色々と面倒なので場所を移動することにした。

千冬さんに頼んで一夏と箒を連れて来て貰った。

「ここなら良いだろう」

そう言っただけで来た場所は生徒指導室と書いてあった。

「ここは防音機能完備だから話を聞かれることはない。さあ、入れ」

言われて俺たちは指導室に入る。

「では、雄太さっきの I S について話して貰うがその前に」

千冬さんは突然スーツのポケットからリモコンのような物を取り出した。そのリモコンのスイッチを一つ押すと扉倒れてそこに聞き耳を立てていた生徒が倒れてきた。

「お前ら盗み聞きしようとはいい度胸だな」

おお、千冬さんの後ろに炎が見える、これがブリュンヒルデの成せる技か。

「そんな元気が有るのならお前らグラウンド十周して来い。後、山田先生は生徒達の監視をするように」

「「「「は、ハイ。分かりました」「」「」」

返事をして生徒達が一目散にグラウンド向かって行く。その中で山田先生がそろりそろりと指導室に入ろうとしていた。

「山田先生」

「はいっ!?!?」

千冬さんのドスの効いた声に山田先生の動き止まる。

「山田先生、私はあなたに生徒の監視をするように言ったはずだが」

「いえ、私も聞いておいたほうがいいかなと思ひまして……」

「いえいえ山田先生、ここは私一人で十分だよ。それとも生徒た

ちと一緒にグラウンド十周して来ますか、PICを切ったISを装備して、もちろん補助動力も切つていいぞ」

「では、生徒たちの監視に行つてきます」

そう言つて山田先生はグラウンドに走つて行つた。

山田先生が去ると千冬さんが先ほどのリモコンをもう一度押す。

すると、倒れていた扉が自動で元に戻つていった。つつか無駄な所に技術使つてるな。

「では沖浦、先程使つていた物について説明しろ」

そう言われて俺は左腕の袖を捲る。そこには黒のリストバンドがついていた。

「セットアップ解除」

俺の言葉に反応してリストバンドは光の粒子になつて一度弾けてから収束し直径十センチ程の球体になる。

「沖浦これは!？」

一夏と箒はきよんとしているが千冬さんは驚愕している。俺としてはもう少し驚いて欲しかったがまあ、いいか。

「そう、ISのコアですよ。正式名称プア・インフィニット・ストラトス、略式PIS。名前どおり劣化版ISのコアで出力は通常のISの十分の一程で体の一部分しか展開できない欠陥品で俺がIS開発技能士を取つた時に研究用のISコアを解析して作つた模造品で今はまだ実験段階で発表はしてない。ここまで一気に喋つたが何か質問ありますか織斑先生」

とりあえず簡単に説明をして周りの顔を見ると一夏と箒は、ぼかんとしていて千冬さんは顎に手を当てて何かを考えているようだ。しばらくして千冬さんが口を開く。

「沖浦、後でPISについての性能と情報の詳細を送れ、それにPISについては極秘情報として扱うから私が何か言つまで他言無用だ、いいな」

「わかりました、織斑先生」

千冬さんの言葉に俺は返事をするが一夏と箒は口を閉ざしたま

まだった。

「いいな、織斑、篠ノ之」

「は、はい」

「お、おう」

スパアン！

「返事は、はいだ馬鹿者。では解散」

そう言っただ冬さんは指導室から出て行った。

指導室のでの尋問から四時間程時間が今は寮の自室で早速一夏にISを教えている所だ。

尋問の後、簿からの質問、いやあれは脅迫に近かったが教えると迫って来たが今はまだ話したくないので冬さんの名前を出して引き下がって貰った。

「よし、雄太にISを教えてもらえばセシリアとの勝負もだいぶ楽になるな」

勉強を始めて一時間くらいで一夏がそんな事を言い出す。アホな事を言っているので俺は一夏の頭を軽く叩く。

「馬鹿か、たった一週間ちよつと勉強したくらいで代表候補生のセシリアに勝てる訳ないだろ」

「そうなのか？」

「ああ、セシリアISに関わった時間は推測でも軽く千時間は超えるだろう。お前が一週間やそこらで勉強したって勝てる見込みは万に一つ有るか無いかだろう」

俺の発言にあからさまに落ち込むがすぐに顔を上げる。

「おいおい、そんな確率で勉強する意味あんのかよ」

「お前がそう思うのも当然だが別にまったく無い訳じゃない。それを少しでも上げるための勉強だ。明日からは放課後に特訓だから覚悟しておけよ」

「はいはい、分かったよ」

こつして、夜は更けて行く。

第六話 P I S (後書き)

中々話が進まない。

雄太の専用機が出るのはいつになるやら。

第七話さあ、一夏特訓の時間だよ

「休み時間は終わりださっさと席につけ」

次の日の二時限目の休み時間も終わり今から三時間目の授業だ。

教師はまあ、千冬さんだ。

パンツッ！

「痛いです織斑先生」

「今お前、頭の中で名前で呼んだろ」

な、なぜ読まれているんだ。

「そ、そんな事ありません」

「ふっ、まあいい」

いいのかよ。叩かれ損じゃないか。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「なに」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそ
うだ」

「????」

一夏がちんぷんかんぷんしていると、教室がざわめいた。

「せ、専用機!? 一年の、この時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ、いいなあ……。私も専用機欲しいなあ」

まったく意味が分からないという一夏の顔を見て千冬さんが溜
息混じりにつぶやく。

「雄太、説明してやれ」

「一夏、ISを作ったのが篠ノ之博士というのは知っているよな」

「あ、ああ」

俺はそれを確認してから話を続ける。

「で、いまでもそのISのコアを作れるのが篠ノ之博士しかないな」

くて、467機を最後に忽然と姿を消したから各国家に分配されたものを企業や組織に更に分けてISの研究・開発を行ってるんだ」

「つまりそういう事だ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

一夏が頭の中で整理をしている間に千冬さんに聞いてみた。

「織斑先生、俺には専用機ないんですか」

「とりあえずは、一夏だけだそうさ。ISの数にも限りがあるからお前に専用機が来るかは正直分からん」

確かに俺よりは千冬さんの弟である一夏の方がいいデータが取れるだろうとの打算なのだろう。

「ありがとうございます」

「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

……まあ、篠ノ之なんて名字、めったにいないしいつかバレるよな。

「そうさ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おい、教師が生徒の個人情報バラしていいのかよ。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ」

授業中だというのに、筈の元にわらわらと女子が集まる。それに筈は少し困った顔をしている。仕方ない、助けてやるか。

「はいはい、授業中なんだから席に戻ろっぜ。それに有名人の身内ってのはいいことばかりじゃないぜ」

俺がそう言つと予想通りブーイングが飛んでくる。

「いいじゃない、ちよつとくらい」

「そうよ、授業を少し聞かなくなつて大丈夫よ」

「悪い事なんて何があるの」

「いやいや、これだから無知は困る。」

「そりゃ「おい」」

俺が口を開こうとしたら途中で遮られてしまった。

「今、授業を聞かなくていいと言つた奴前が出る。私直々に授業が何たるかをその身に叩き込んでやる」

その後、教室は阿鼻叫喚の地獄絵図になった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかつたでしょうけど」

休み時間、早速俺たちの席にやってきたセシリア。あの千冬さんの地獄の説教に堪えた様子を見せないあたりさすがは代表候補生と叫ぶところか。

「今、わたくしのこと少し馬鹿にしましたでしょう雄太さん」

「ソレハキノセイダ」

「言葉が片言になっていますがまあ、いいでしょう。良かったですわね、これでフェアな勝負ができますわね」

「？　なんで？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなた方に教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「イギリスって事はBTか」

「っ!？」

「BTって何？」

俺の一言にセシリアは驚きの、一夏は不思議そうな表情をする。
「なんであなたが、わたくしの専用機を知っていらっしやるんですか」

驚きの表情も束の間、すぐにセシリアは俺に喰ってかかる。

「そりゃ、BTの基礎理論作ったの俺だぞ。まさか代表候補生が自分の専用機の製作に関わった奴を知らないなんてないよな」

俺の言葉に信じられないという顔をするがセシリアは直ぐに顔を引き締めて反論してくる。

「それは本当ですか？ わたくしの知っている限り製作に関わった人の中に日本人の名前は有りませんでしたわよ、ほら」

そう言っただけで来た携帯端末の表示には製作に関わった人と思しき名前が並んでいるが確かに日本人の名前はどこにも乗っていませんでした。

「じゃあ、これを見てもそう言える」

そう言っただけで俺も携帯端末を取り出しセシリアに見せる。

「こ、これは!?!」

「これで信じてくれるかい」

「え、ええ確かに、後で本国に問い合わせてみますわ」

ちなみに俺が見せたのはBTの基礎理論とその設計図、これで信用されなかったら相手は余程の馬鹿だろう。

「で、結局BTって何？」

「簡単に言えばセシリアのISについてなんだが、お前には何も教えないからな。お前だけ相手の情報があつたら不公平だからな」

「おう、卑怯な事はしたくないからな」

「さすが一夏、よく言った。セシリアもそれでいいよな」

「まあ、いいでしょう。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

かっこよくポーズを決めてそのまま立ち去っていった。

「雄太、飯食いに行こうぜ」

「いいぜ。だけどその前にちょっといいか」

「いいよ」

一夏の許可を貰い俺は窓際にいるだろう人物に声をかける。

「箒も飯いこうぜ」

さっきの授業から束さんの名前が出たせいか妙にぴりぴりしていて箒が浮いている。一夏もそれが気になっていようで今俺に声をかけた時にちらりと箒の方を見ていた。

「他に誰か一緒に行かない？」

適当に話を振ってみる。

「はいはいはいっ！」

「いくよー。ちょっと待って！」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

俺と一夏がいるからだろうがなかなか入れ食いだな。まあ、それでもいいか。

「……私は、いい」

「そう言わずにさ。ほら、行こうぜ」

「お、おいつ。私は行かないと……う、腕を組むなっ！」

箒は少し頑固なところがあるから強引な位がちょうどいいだろう。

「は、離せ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！ ええいつ」

箒の腕に絡ませていた腕を捻りながら箒が俺を投げる。

「なんの！」

俺は捻られた腕に合わせて体を捻り半回転して箒の前に立つ。

「箒、腕あげたな」

「こんなものは剣術のおまけだ。雄太こそ鍛錬は怠っていないよ
うだな」

「おかげさまで」

古武術をおまけで習得している女子は日本でお前だけだよ。それに今のやり取りで集まった女子が逃げたじゃないか。

「一夏、右を」

「おう」

俺の言葉に一夏は箒の右腕を俺は左腕を掴む。

「お、おい！ 離せ」

両側からのホールルド状態で抵抗できずに箒が叫んでいる。

「一夏、学食何にする」

「俺は日替わりかな。雄太は？」

「日替わりもいいけど今はチキン南蛮かな」

「私の話を聞けー」

そのまま俺たちは箒の叫びをBGMに学食に行った。

その週の日曜日俺と一夏と箒の三人は第二アリーナに来ていた。

前の学食の時に箒に頼んで放課後に一夏を鍛え直してもらった。

箒に頼んだ理由はその間に俺は夜の勉強の為に教科書から必要最低限、必要な場所を厳選して勉強の準備をしていた。特訓のの描写がないのは一夏が苛められてるだけを描写しても面白くないじゃん。

(一夏がどんな目にあっていたかわ読者の想像にお任せ)

「で、雄太。なぜ一夏の専用機が無いのに私達は剣道場でなくてアリーナにいるんだ」

剣道の防具を着た箒がふてくされながら言った。

セシリアとの対決を明日に控えているがまだ一夏の専用機は準備できていない。だが、一度もISでの訓練をせずにセシリアと戦うのは無謀すぎるので千冬さんに許可をもらいこのアリーナと訓練機を一機借りている。千冬さんからは「思いつきりしごいてやれ」とのお言葉を貰っている。

「一夏、準備はいいか」

「おう、いつでもいいぜ」

ラファール・リヴァイブを装着した一夏が来た。それから今日

やることを確認する。

「今日は午前中は回避行動、午後は技能を一つ習得して貰う。いいな織斑一等兵」

「はっ、沖浦教官。所で教官」

「何だ一等兵」

「何で射撃の訓練はしないんですか？」

「一夏の疑問はもっともだがこれには理由がある。」

「攻撃は剣による近接戦闘だけでして貰う。理由は無意味になる可能性があると時間が足りないからだ」

「一夏の頭の上にハテナが舞っているが気にせず俺は続ける。」

「時間が足りないのはISの射撃における軌道計算や風などの環境における弾頭への影響等数え挙げればきりがながこれをお前は短期間で実践レベルまで持ってこれるか」

「いえ、無理です」

即答する一夏。

うん、素直なのは良いことだ。

「無意味になるのはお前の専用機がまだないからだ。お前の専用機の初期武装に射撃武器がなければそれだけ時間の無駄だ。逆に射撃武器だけでも最悪殴つても攻撃できるしそのために毎日放課後に箒に特訓つけて貰ったんだよ、解ったか一夏」

「お、おう」

「で、IS一機で何をするんだ」

「一夏と少し遊んだら箒に睨まれてしまった。」

「俺にはこれがあるからな。セット」

そう言つて俺は左腕にPISを出現させる。

その形状は前に出したのとは異なり二門の砲門がついている。

「これはこの前の奴の射撃仕様でビームが撃てる。百聞は一見に如かずつてね」

俺はPISの砲身を一夏の足元に向ける。

「バースト」

砲身からピンク色の光が一夏の足元に飛んで行く。

「うわっ」

一夏はそれを上に飛んで回避する。

「中々いい回避だぞ一夏。じゃあ、ばんばん行ってみよう。バースト、バースト、バーストっ!!」

「くっ!? おい、最初に動きの確認とかするだろ普通」

必死にビームを避けながら一夏が訴えている。

「時間が少ないから避けながら覚えろ。それに筋は悪くないぞ」

「ほんとか」

「はい、隙あり」

俺の言葉に一夏が動きを止める。

そこにビームが当たる。

「はい、動きを止めない。さっきも言ったが時間が少ないからびしばしいくぞ。はい箒もこれ付けて」

俺は箒にP I Sのコアクリスタルを渡す。

「セットって言えば装着出来るから箒も撃って一夏の訓練手伝ってくれ。あ、後バーストは言わなくてもビームを撃ち出すイメージをすれば撃てるから」

「わ、分かった。こうだなセット」

箒の右腕に光の粒子が集まりP I Sの形を形成する。

「それでいいよ箒。じゃあ一夏、しっかりハイパーセンサーと自分の目で確認しながら回避しろよ」

「ちよ、俺死ぬうー」

それからお昼まで回避の訓練をした後、休憩を挟んで技能の取得を行ったが俺の予想より早く二時間で一夏は技能を自分の物にしたのでそれから日が沈むまで技能の応用と回避訓練をして一夏グロッキーになったところで明日に備えて休んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524t/>

I・S ~ 黒き翼を背負う者 ~

2011年10月31日23時08分発行